『夜の寝覚』老関白の養子について――三位中将と左衛門督――

倉田　実

はじめに

『夜の寝覚』が、ほぼ同時代に成立した『狭衣物語』とともに、養子女たちの物語という側面を保持していることについて、拙著『王朝摂関期の養女たち』（翰林書房、二〇〇四年一一月）で言及してきた。『夜の寝覚』については、石山姫君・まさこ君・大君遺児の小姫君・老関白遺児の姫君たちがそれぞれ養子女であったことを扱ったが、男主人公（以下、男君と呼称する）の弟三位中将（以下、弟君とする）も老関白の養子となっていたこと、また、寝覚の君の異母兄左衛門督（以下、長兄とする）が老関白を親のようにしていたことなどは論じ残していた。そこで拙著の不備を補うべく、この小稿では男君の弟君三位中将と、寝覚の君の長兄左衛門督を焦点化していくことにしたい。以下で言及する養子縁組の制度や事例に関しては、概ね先の拙著においてすでに扱ったので参照願いたい。

なお、『夜の寝覚』にある中間欠巻部分の復元に関しては、改作本『夜寝覚物語』の独自性に留意しつつ積極的に活用すべきとの立場にたち、引証していく。『夜の寝覚』の本文は「新編日本古典文学全集」（小学館）に拠って原作本と呼称し、『夜寝覚物語』は「鎌倉時代物語集成」（笠間書院）に拠って私に本文を作り改作本と呼称する。

一　老関白の系譜

まず最初に、弟君も長兄もかかわっている老関白の設定について見ておきたい。老関白は、中間欠巻部分からの登場であり、その血筋は原作本で明確に語られていないが、改作本では男君の父大殿の弟になっている。男君からすれば、叔父であり、登場の時点で左大将であった。

大納言（男君）の御叔父に、左大将にておはする人、御年は四十七ばかりにて、人がらやむごとなくおはするが、

（改作本巻二・三八三頁）

この叔父にあたる左大将が後の老関白であり、寝覚の君への熱心な求婚者として登場している。この時点で大殿が関白左大臣であったが、摂関は実子の男君にではなく、この左大将に渡っており、『無名草子』などで「老関白」と呼称されることになる。関白が譲られた次第は、次のようであった。求婚から結婚に至り、夫婦生活が円満になる次第などは、省略したい。

世のまつりごと（関白職）、大納言（男君）に譲りたまはんこと、憚りあるべからず。齢こそ若くものしたまへ、人がら、才覚、賢く優れたまへれば、殿（大殿）の御心、なほありがたうものしたまひて、我が子とも言はじ、大納言のかたち、心ばえすぎてあま

りなるに、齢よりも官、位過ぎたまひなんことあやうく、中宮は、東宮おはしませば、何の疑ひかあらん。故殿の、左大将の御事を限りなくおぼして、いまはの時まで、「人におとしたまふな」と、返す返すのたまひをきしうへに、大納言もおほかたこのきはに、ものの望みなきよし申したまへば、大将殿に世の中譲りたまふ。大納言を摑きて、我とはおぼさじ、時の后の御兄、東宮の御伯父、人がら、身の才、こよなう優れたまへれば、我が身思ひかくべきにもあらずと、思ひ離れたまひしに、かかれば、夢のやうにおぼすこと限りなし。関白の宣旨かうむりたまふ。

（改作本巻三・四五五頁）

摂関は、大殿の判断で、弟の左大将に渡されており、男君が関白になるのは、末尾欠巻部分になる。ただし、改作本は、老関白死後に男君が内覧になったとしているが（改作本巻四・四九七頁）、原作本にその面影はない。大殿は、男君が関白に今就くことに対して、「齢よりも官、位過ぎたまひなんこと」になるのであやうく思っているが、将来継承することは、「何の疑ひかあらん」と確信している。また、弟を貶めるなとする「故殿」（関白であろう）の遺言を遵守したい思いがあり、男君もまだ関白にこだわっていないようなので、弟の左大将（老関白）に渡すことにしたのであった。

男君が継承するものと判断していた左大将は、思ってもみなかった成り行きに感激しており、その感激が、ますます兄やその子息を重んじることになったと思われる。関白の継承は、何の問題もなかったのであり、兄弟間は友好的なのであった。

当時の摂関職は九条師輔流において代々弟か子に継承されて来ており、このことからすれば、原作本も、改作本のように老関白は大殿の弟以外にはあり得ないであろう。摂関が弟に直接継承された事例としては、［伊尹→兼通］［道隆→道兼→道長］と、［頼通→教通］のケースにあった。後者は、教通から頼通男の師実にもどって継承され、その直系の孫となる忠実から天皇家の外戚とならない「摂関家」が成立していくことになる。［頼通（兄）→教通（弟）→師実（兄の子）］のケースは、これ以外に十一世紀以前の史実になく、改作本からする、［大殿（兄）→老関白（弟）→男君（兄の子）］と同じになる。原作本でも、このルート以外には想定できないので、大殿と老関白は兄弟とするのが妥当なのであり、モデルとしてこの［頼通→教通］のケースなどが念頭にあった可能性があろう。頼通から教通に摂関が渡ったのは、亡き父道長の意向であったとされている[1]。ただし、この二人は、後朱雀帝の御世になって、入内問題を契機として確執を表面化している。

教通が関白になった時は、すでに七十三歳になっており、老関白の年齢とそぐわない。しかし、老関白は、亡妻との間に三人の女子がいて寝覚の君と再婚し、女子の一人が尚侍になるという設定において、教通と似通っている。教通は、公任女との間に、生子・真子・歓子の三人の女子を儲け（『尊卑分脈』の子女説明はかなりあやしい）、公任女が死去した後に、左大将であった万寿三（一〇二六）年の三十一歳で、二十四歳の禔子内親王を降嫁させている。生子と歓子は、それぞれ後朱雀帝と後冷泉帝に入内しているが、真子は尚侍になっていた。境遇的に相似しているのである。

また、老関白は「髯黒らかにて」（改作本巻二・四二二頁）とされ、教通も『栄花物語』（新全集に拠る）で「髯がちにて、母もなき子をおほしたてけん」（暮待つ星巻・三〇六頁）とされていた。頼通と大殿との連関性は別に考えたいが、教通と老関白とは類縁性が認められよう。そうだとしたら、教通が関白になったのは、頼通死後の治暦四（一〇六八）年であり、『夜の寝覚』成立はそれ以降となる。蓋然性は認められるかも知れない。なお、「髯黒らか」は、『源氏物語』の鬚黒大将の引用でもあろう。鬚黒は、北の方がいながら、熱心に玉鬘に求婚し、三十二、三歳で結婚していた。女は、真木柱一人であった。鬚黒については、以上の指摘だけにとどめたい。

さて、この左大将として登場した老関白は、原作本でも男君の叔父と認定できるのであり、それは邸宅のありようから指摘できよう。原

作本巻三で、寝覚の君が居住するのは、亡き老関白邸であり、「北殿」（原作本巻三・二三二頁）と呼称されている。これに対して男君が住むのは、「我が名残にてとどまりし故殿の御殿」（原作本巻三・二三七頁）とされ、ここの「故殿」は男君の父親を指すので、亡き大殿邸になる。老関白邸が「北殿」とされ、「近きほど」（原作本巻四・四〇五頁）とされる大殿邸は「南殿」となろう。この呼称は見出せないが、改作本では、すでに指摘したように、「南の第」（改作本巻四・四九七頁）との用例がある。原作本でも「北殿」との呼称は、「南殿」があって成り立つはずである。したがって、大殿と老関白は兄弟であり、その父在世中に邸第は「北殿」「南殿」と呼称され[2]、死後二人の兄弟に相続されたことが想定できる。そして、「北殿」は寝覚の君に、「南殿」は男君に伝領されたのである。邸宅のありようは、改作本のように、大殿と老関白が兄弟であることを指示していよう。

老関白は、兄から関白を友好的に譲られたわけであり、この点と、兄の次男（弟君）を養子に迎えたことは、抱き合わせの関係になっていた。関白の系譜を確認したのに続いて、問題とする弟君の出養関係に転じていきたい。

二　弟君の出養

原作本において、尚侍入内時や寝覚の君の宮中退出時その他で、弟君たちなどの扈従ぶりがしばしば語られており、それは、弟君が老関白遺児の弟姫君の婿になっていたからだけでなく、老関白の養子であったからと理解するのがいいようである。原作本で養子とする語りはないが、改作本では明確に弟君は老関白の養子になっており、その縁で弟姫君の婿となっていた。出養したとする語りは数カ所に認められ、その初回は次のようにされていた。

大将殿（男君）の御弟、二位の中将、権中納言になる、殿（老関白邸）の西の対に移して、御子のやうにて、殿の中は、ただこの御ままなれば、故殿（大殿）のおはせしに変はらず。

（改作本巻三・四五七頁）

大殿死去の忌があけた段であり、老関白は弟君を自邸の西の対に住まわせて「御子のやうに」にしたとされている。ここでの「御子のやう」は、後の語りからして養子にした意になるが、その理由は示されていない。しかし、大殿の死が契機になったろうことは、この時点で判断されるし、次の箇所で明確になる。

明くる年三月に、関白殿の若君（まさこ君）、今年七つになりたまへるを、年のほどよりも聡く、賢くおはすれば、殿上せさせたてまつらんとて、おぼし急ぐ。上達部・殿上人など参り集ひたまふ。よそひいみじく、響きののしる。限りなくかしづきたてて、殿の御車に乗せたてまつりたまふ。大将殿（男君）の御弟、権中納言殿をば、故殿（大殿）の申しをかせたまひたるままに、関白殿の御子にしたて参らせたまひたれば、やがて御供したまふ。

（改作本巻三・四七八頁）

まさこ君が童殿上する段である。老関白が弟君を養子にしたのは、「故殿の申しをかせたまひたるまま」とあるように、大殿の遺言があったからであった。「関白殿の御子にし…」が、養子縁組されたことを示している。遺言の内容は語られていないが、関白の譲りと抱き合わせであったことは間違いないと思われる。

大殿は、次男の処遇を老関白の養子にすることで高めようとしたのであろう。長男の男君が将来摂関になることは、先に引用したように確信しているが、次男にはそれがない。次の関白の養子にすれば、その将来が大きく開ける可能性はこのままよりも高い。だから、弟君の将来を思って養子縁組を老関白に依頼したのであろう。そして、弟君にとっても、この出養は願ってもないことであった。関白からの直接的な庇護が得られるからであり、それは昇進において実現することになる。さらに、世間的には幼いまさこ君しか男子のいない老関白も、自身の手足となる成年の養子ができれば、好都合であった。養子は実

子と変わりなく、親への礼を尽すのが普通である。史実でも小野宮流実資は、養子にした兄懐平の子資平を手足のようにしていた。老関白も養子縁組に期することがあったろうことは間違いない。

なお、息子を弟の養子にすることは、史実において摂関に認められないが、その他では実資・資平のような例がそれなりに認められる。道綱は息子の兼綱を異母弟道長の養子にし、頼宗は息子の能長を同母弟の能信の養子にしていた。また、弟が息子を兄の養子にすることは、教通が長男信家を頼通の養子にした例その他がある。オジと甥の養子縁組は一般的なのであった。

弟君は、父の遺言によって叔父の老関白の養子になったのであった。だから、まさこ君の童殿上に際して、「御供したまふ」ことになる。養親の意向に従うからであり、まさこ君と兄弟となっていたからでもある。先に、老関白邸の西の対に移居したと語られていたので、年が離れているとはいえ、同居の兄弟としての交わりもしていたことであろう。

弟君は老関白の養子になったことで昇進が果たされている。

その夜の司召に、関白殿は、太政大臣に上がりたまふ。左大臣の致仕申したまふ代はりに、大将殿（男君）、左大臣かけたまふ。内大臣、右大臣に上がりたまふ。一の大納言、内大臣になりたまひぬれば、中納言（弟君）、大納言になりたまふ。左衛門督（長兄）、もとは権中納言にておはせし、正二位に上がりて検非違使の別当にぞなりたまふ。宰相の中将（次兄）、権中納言に移る。式部卿宮の中将、宰相かけたまふ。別当の御子の兵衛佐、中将になり、弟の侍従ときこえしは、少将になる。権中納言の御子、はじめて出でたまひたるをば、兵衛佐になさる。ひとへにこの御筋のみの栄えなり。されば、道理なきことに、恨み誹る人多かり。

（改作本巻三・四八二～三頁）

「この御筋のみの栄えなり」とあるように、老関白の専断で行なわれた司召は、故大殿の子息、及び、寝覚の君の兄弟とその子息たちの抜擢があからさまであった。弟君も数のうちに入っているのは、大殿の次男であり、自身の養子であったからとするのが素直であろう。上席が空いていても、昇進されない例は幾らでもある。中納言と大納言とでは、かなりの差があったので、昇進はまさに慶事であった。

老関白が兄の子息たちを抜擢したのは、兄と友好的だったからである。摂関家内部で兄弟間が争うことは、史実でも多くあった。兼通と兼家の争いは、『蜻蛉日記』にも反映して有名だし、教通女生子の後朱雀帝入内を快く思わなかった頼通は、その当日などに公卿・殿上人たちの扈従を牽制していた。兄弟が本来的に、友好的融和的とするのは幻想であり、必ずしもそうならない事例は多い。しかし、老関白は兄の恩誼を思い、その子息たちを抜擢したのである。そして、その一人は養子になっていた。

また、この司召では、妻方の縁者を抜擢していることにもなり、これは、頼通以降に顕著な傾向と連動しているかも知れない。例えは悪いが、『源氏物語』で、光源氏が妻方縁者を厚遇することなど語ろうとしていない。そもそも妻方縁者をあまり設定していないのである。紫の上の異母兄弟がどうなっていたか不明だし、花散里は孤児のようでもあった。これに対して、『夜の寝覚』『夜寝覚物語』は、妻方、すなわち寝覚の君の兄弟が、夫の老関白によって厚遇抜擢されている。時代の位相差があるわけであり、『夜の寝覚』は、妻方縁者の取りたてがあることによって寝覚の君造型を成り立たせていよう。老関白の政権運営のあり方としても注意しておきたい。

なお、男君は右の引用部で左大臣になったとされているが、原作本巻三では内大臣であり、改作本の改変となる。この他の官位のありようも原作本と相違しているようであるが、弟君の任大納言は改変されなかったであろう。原作本巻三でも大納言としての登場であった。

さて、養子となった弟君は、こうした養父老関白の専断によって大納言になったのであった。弟君の出養のことは、この他に、老関白が「養子の親」（改作本巻四・四九七頁）であったから、その死去に際し

て喪服を着たということで語られている。親の喪に子として服していたのであり、老関白邸にとどまっていた。養親子関係でも、実子と変わらず服喪したのが当時であった。

また、「故大殿（老関白）の取り分き子にしたまひ」（改作本巻四・五一二頁）ということがあったから、その遺児弟姫君の婿となっていた。これまでも養子でいたから、婿として安心とされたのである。この時点で、老関白の三人の遺児たちは、寝覚の君の養女になっていたので、その了解の上であった。

当時の養子女は、両親や「家」に着くのではなく、個人に着いていたので、弟君にとって、寝覚の君は養母ではなく、継母であった。養母（養子）と継母（継子）は同義でないし、寝覚の君が弟君の養母となったとする語りはない。弟君と寝覚の君は継親子関係であった。継親子関係の維持は、養親子関係と違って恣意的であり、養子縁組されていない段階では、互いに責任関係はなかったと思われる。したがって、養親の老関白死去後に、その邸は寝覚の君に委譲されていたため、弟君は、生前のように住み続けることができないこともあり得たであろう。しかし、その縁が大切にされて弟姫君の婿となり、原作本にもあるように旧老関白邸に住むことができていたと解せよう。弟君は、継母から、婚姻によって義母になった寝覚の君にも恩誼があるわけであった。老関白との出養関係が生きていたのであったし、弟君はその関係が付与されたから、物語での登場が可能なのであった。

＊　＊　＊

弟君は老関白の養子であった恩誼があり、さらにその実女で、正妻寝覚の君の養女となっていた弟姫君の婿になったことでも恩誼があるわけであった。だから、弟姫君の長姉が尚侍として入内する際や、付き添って参内していた寝覚の君の宮中退出などに扈従することになる。弟君が出養していたことは、原作本の理解にも必須であろう。この点をさらに確認していきたい。

内侍督の御参り、正月の二十日あまりのほどなれば、いと近くなりぬる御いそぎのことどもばかりは、大納言たち、中納言、帥などに、くはしくきこえおきて、（原作本巻三・二三〇頁）

右の「大納言たち」は、弟君と寝覚の君の長兄になる。「中納言」は次兄、「帥」は新全集が指摘するように、「大弐」の誤りで、対の君の夫である。寝覚の君は、これらの男性たちに尚侍入内の準備をさせていたのである。男性たちは、寝覚の君の縁者であったからだけでなく、故老関白にも恩誼があったからであった。弟君の他に、長兄は次節で扱うように「父子の礼」をとっていたようであり、次兄ともども昇進を諮ってくれた恩誼がある。「帥」は老関白の配慮があって対の君を妻とすることができていた（改作本巻三・四五九～六〇頁）。改作本で知られるこうした恩誼は、中間欠巻部分にもあったとした方が妥当であろう。亡き老関白への恩誼に報いるために遺児の尚侍入内に奉仕し、さらに、その正妻であった寝覚の君の指示に応じていたと解するのが妥当であろう。弟君に関しては、老関白の養子であったことが重要なのである。

入内に際しては、「大納言二人、中納言、大弐の中納言、源宰相中将（中姫君の婿）、その次々」（原作本巻三・二四〇頁）が供奉、扈従していた。こうした語りで、これらの男性たちは、寝覚の君の「近習の人」「股肱の臣」とも言うべき位置づけがされていよう。弟君もこの一員として恪勤しているのであり、さらに右の語りは、次のように展開している。

内侍督の上りたまひぬるより、やがてさぶらひたまひて、…大納言たち、中納言、その子どもも、女房なども、立ち騒ぎ、隙あるべうもあらず。（原作本巻三・二四一頁）

中姫君の婿となった宰相中将のことは語られなくても、弟姫君婿の弟君のことは、寝覚の君の兄弟たちとともに必ず示されている。男君の弟で、婿だからという点よりも、そもそも老関白の養子であったからと理解した方がやはり妥当であろう。

原作本は、さらに寝覚の君の宮中退出に際しても、同じような扈従

ぶりを語っている。

大納言二人、中納言、源宰相中将など、かかる（退出の）折の宮仕へをだにこそはと、みな心を尽して、おりたち、もてかしづきたまひたるさま、いとあらまほしきに、（原作本巻四・三三九頁）

弟君たちは寝覚の君退出に扈従するとともに、内侍督への後見も継続している。

新大納言（弟君）、権大納言（長兄）、新中納言（次兄）など、いと真心に、思ひ後見きこえたまふ。大弐（対の君の夫）、いとしたたかなる御後見にてありなどすれば、なかなか親立ち添ひ、皇子たちおはする御方々よりも、いとはなやかにもてなされて、人のあなづるべうもあらず。（原作本巻四・三六五～六頁）

弟君をはじめとする近習の者とも言うべき人たちの真心の後見があって、内侍督は華やかで安泰である。こうした語りで蔭ながら後見する養母寝覚の君の采配ぶりも暗示していよう。なお、「大弐」にかかわる新全集の口語訳では、「大弐がまた、がっしりと経済面を支えていたりするので」としているが、適切な読みとなろう。大弐、すなわち太宰大弐は、その役がら、海外交易による収入がかなりあったと想定され、経済的に裕福であった。その大弐が老関白との縁もあって、「いとしたたかなる御後見」になっていたのは、きわめて頼もしいのである。

寝覚の君が、帝の闖入事件から無事に逃れ、やっとのことで自邸に戻っても、男君の心配は消えることはない。寝覚の君邸の東西の対には、それぞれ宰相中将と弟君が婿として居住しているからであった。

かくのみ厭ひ離れたまひては、ひとりはいかでか明かしたまはむ。さばかりおほけなき思ひ絶ゆべくもあらぬ宰相中将を、片端に置きて、はらからとも言はじ、大納言（弟君）も、思ふままに、くまなき心ある人なり、かかる人々を左右に置きたまひて、我はかすかに夜を明かいたまはむこそ、うしろめたけれ。いと忍びて姫君のもとに渡りたまへ。（原作本巻四・三五九～六〇頁）

宮中から自邸に戻った寝覚の君のもとに男君が出かけ、あれこれと口説く段である。ここで、「さばかりおほけなき思ひ絶ゆべくもあらぬ宰相中将」とされるのは、改作本で明らかなように、寝覚の君に思いをかけていた宰相中将が、誤って中姫君を盗みだしたことを暗示している。事態の修復を願った寝覚の君の配慮などで、二人の結婚は認知され、寝覚の君邸に住まいすることになっていた。その宰相中将が寝覚の君をどうにかしないかと、男君は心配なのである。

また、「くまなき心ある人」、すなわち花心の弟君は、寝覚の君が継母であった。継子が継母に懸想する話は、それなりにある。『源氏物語』でも、空蟬は継子の紀伊守に懸想され、夕霧はひそやかに紫の上に対する思慕の情を抱いていた。改作本では、弟君を弟姫君の婿にする際、男君は次のように継母寝覚の君と継子弟君との関係を問いただしていた。

大将（弟君）の参りたまひたるに、「かかること（婚儀）をなむ、権中納言（次兄）のものしたまひし。さ聞きたまひたりや」と問ひたまへば、「さもはべらず」と申したまふ。「同じくは、良きことなり。さて年ごろ、親しくかしこにものせられしに、北の方（寝覚の君）は、自らなど対面せらるる時もありきや」とのたまへば、「故殿（老関白）の、南面の御簾の内には許して、女房の中には入れたまひしかど、すべてその人の御気配、聞くことはべらず。今も御簾の中には入りはべれど、対の君などいふ人にて、聞こえたまふ」と申したまへば、「恥づかしき人の様なり。よくよく心して、花心なる様も、思はれたてまつりたまふな」など教へたまふ。（改作本巻四・五一二頁）

弟君を、寝覚の君の養女の婿とする際に、男君が懸念したのは、継親子関係にあったことであった。「親しくかしこにものせられし」が、老関白の養子となったことで、弟君が寝覚の君と継親子関係になっていたことを言っている。どれほど親密な関係であったのかを男君は知りたいのである。当然ここには嫉妬の情が隠されていよう。しかし、弟君の答えは、男君を安心させるものであった。老関白の方針によっ

て、寝覚の君との対面は、「南面の御簾の内には許して」、直接の会話はなかったのであり、それは現在にも引き続いていたのであった。これは、光源氏が夕霧と明石姫君との対面を、「南面の御簾の内は許したまへり」（新全集に拠る。蜻巻・二一七頁）としたことの引用であり、夕霧を紫の上に近づけなかったよりも緩やかだが、それでも一線を画していたのは間違いない。老関白は、寝覚の君を気遣って間違いが起きないように配慮していたのであり、継子の懸想を防止していたのである。男君は、老関白や寝覚の君のたしなみを知ってひとまず安心したわけであったが、この次第は中間欠巻部分にもあったことと思われる。こうしたことがあったとしても、「くまなき心ある人」である弟君がいることで、退出した寝覚の君が心配なのである。すなわち、弟君が、老関白の養子であったことに応じているのである。

原作本の範囲では、婿となった宰相中将も弟君も、寝覚の君との関係に齟齬をきたしていない。寝覚の君が養女たちに、実母と変わらない情愛をそそぎ、養女たちの結婚生活への後見もきちんと果たしていたからになろう。だから、婿たちは、義母に対する配慮や奉仕に怠ることはない。広沢に移るに際して、「大納言、宰相の夜昼の御装束どもたてまつりたまふ」（原作本巻四・四〇九頁）ことが語られ、「大納言、中納言、またその御子ども、宰相中将など、みな送りにおはす」（原作本巻四・四一一頁）とされている。扈従することは、当然なのである。

こうした婿たちの奉仕ぶりは、寝覚の君の認知するところとなっている。広沢で出家を決意した際、「宰相、大納言の上たちは、いとうしろやすし」（原作本巻五・四三三頁）と思っている。弟君たちの自分への奉仕ぶりは、その妻たちに対する情愛の確かさの現れである。だから、将来は安心とするのである。また、二人への評価は、男君も同じようになっており、司召できちんとした配慮をしている。最後に、この司召を見ておきたい。

そのつごもりの司召に、我、右大臣になりたまひて、一の大納言を内大臣になし上げ、くつろげて、大将に新大納言（弟君）、新中納言（次兄）、大納言にないて陸奥国の按察使かけさせたまふ。源宰相中将を中納言になして衛門督かけ、前大弐を民部卿になして、権大納言（長兄）の子の弁少将を右大将に上げて頭になり、少将が下りし尾張守、讃岐になりなど、ただこの御ゆかりの一筋の、世の道理も消ちて喜び栄えたるさまを、「いづれの御世にもいみじの人のおぼえや」と、言ひおどろきたり。さらにも言はず、引きつづきて、殿の上（寝覚の君）拝みたてまつりてぞ、ほかには歩きたまひける。

（原作本巻五・五二一頁）

右大臣になった男君主導の司召になる。寝覚の君の二人の婿をそれなりに待遇し、寝覚の君の次兄を取りたてている。長兄の昇進は見送られて、その子息に振り当てられている。次兄は、中納言から権大納言を飛ばして按察使大納言に二階級昇進し、権大納言のままに据え置かれた長兄を超えたのであろう。男君は、かつての老関白と同様の専断の趣だが、そろそろ独自性が出てきている。長兄の処遇にそれは現れているが、この点は次節で触れたい。また、弟君は老関白の養子であったことより、今現在寝覚の君の婿であることに比重が置かれているようである。寝覚の君は、「殿の上（男君の北の方）」との呼称で指示されており、慶び申しにまず赴く所となっている。これも男君の時代だからであろう。しかし、もとをただせば、弟君が老関白の養子であったから、ここまでの道のりがあったことは確かである。

以上、弟君が老関白の養子となった次第と、それ以降の物語展開をかいつまんで見てきたことになる。この養子縁組は、大殿と老関白の兄弟関係に発して、その一族の紐帯を語るものでもあった。老関白から言えば、それによって勢力関係の拡大をはかるものとなり、弟君は、縁組されたことで昇進が果たせていた。これらの様相は、頼通の時代における貴族社会の実際と見合っているのである。

三　長兄の「父子の礼」

原作本巻一・二における左衛門督、すなわち長兄は、大君側の人物として寝覚の君に批判的な姿勢を見せていた。しかし、中間欠巻部分の後となる巻三では、前節で必然的に触れてきたように、寝覚の君の後見役として働いている。この相違の生じた大きな理由が、老関白への長兄のかかわり方であった。

まず、原作本巻三のありようを見ておきたい。寝覚の君の宮中退出に際して、輦車の宣旨がなかなか下りないことに対して、長兄は次のように言っていた。その前後を引用する。

「いかで、かかること（帝の懸想）を見ず、疾く、この百敷のうちを離れなばや」と、暮れゆくも静心なきままに、権大納言（長兄）の参りたまひつるに、「乱り心地のいと悪しくはべるに、今宵なども、まかでなばや」と聞こえたまへば、「げに久しうならせたまひぬかし。など輦車の宣旨は、しぶらせたまふにか。我が御身、一世の源氏、近き帝の御孫、前の関白左大臣の上にて、輦車許されたまはむ、難かべきことかは。いとあやし」と、うちつぶやきて、案内申させたまへば、大臣（男君）も御前にさぶらひたまふ。

（原作本巻三・三〇六～七頁）

長兄は、寝覚の君から相談を受けるまでになっている。輦車の宣旨が下りない不当さをまくしたてているが、そこには自身の自負も含まれていよう。寝覚の君が「一世の源氏、近き帝の御孫」とするのは、自分も同じである。「一世の源氏」は、新全集が指摘するように、「一世源氏の家の者の意」であろう。そして、「前の関白左大臣の上」であることを強調している。故老関白をことさら言挙げしているのである。それは、自身もその庇護に預かっていたからであった。

老関白が長兄を推挽していたことは、原作本でも確認できる。

権大納言も、故殿（老関白）の御世に、我がままにほひ出でたまひしかば、「この御陰にこそ、面立たしきものなりけれ」とおぼせば、いにしへの心掟も悔しかりければ、今はきこえ出でたまふこともなきなるべし。それよりほかは、さしこえ、誰かは殿の上（老関白北の方の寝覚の君）の御事とては、さばかりになりたまひぬる人の御事を、きこえ出づる人のあらむ。

（原作本巻四・四一四頁）

寝覚の君が広沢に移っての段である。長兄は、ここで、これまでの経緯を懐古している。老関白の北の方となった寝覚の君のお蔭で昇進できたことを思い、過去に大君側に付いて寝覚の君に辛くあたったこと、すなわち「いにしへの心掟」を悔いている。だから、もう悪くいうつもりもないのである。長兄でさえこうした心境にあるので、老関白の北の方として縁者を引きたて、内侍督の後見や他の養女たちの結婚生活に対する世話まで万事怠らない寝覚の君に対して、もう誰もとやかく言う人はいないとしている。寝覚の君のお蔭で、誰も安泰であったとする文脈にもなるが、それを一番感じていたのは、長兄になろう。寝覚の君が老関白の北の方となったため、老関白の推挽があったとする懐古は、重いのである。

長兄が老関白に引きたてられたのは、確かである。しかし、老関白が寝覚の君の長兄であったから推挽したと解するだけでは十分な説明にならない。兄弟だからといって、庇護が受けられるとは限らないのである。老関白と長兄のかかわりを改作本によって探りつけておいた方がいいようである。次に、中間欠巻部分に当たる改作本を見ていくことにしたい。

＊　＊　＊

長兄が推挽された理由の結論から先に言えば、老関白と寝覚の君の結婚を推進した役割が挙げられよう。それによって、老関白に目をかけられたと言える。また、こうした関係になったことで、長兄は老関白に対して、古記録などに散見する「父子の礼」という仕方でもって忠勤したのだろう。この二点があったから、老関白は原作本で語られ

たように、長兄を推挽することになったと思われる。以下、具体的に確認しておきたい。

まず、結婚の仲人的役割である。

左大将殿（老関白）は、入道殿の、このことさもとおぼしたりし後は、入道殿は世を遁れておはすれば、うるさくおぼしなんとつつましくて、左衛門督（長兄）こそ、このかみにて、この人（寝覚の君）のことをも知りたまはめとて、常に懇ろに語らひたまへば、左衛門督の心にも、（改作本巻二・三九二頁）

引用部に続くのは、長兄が結婚を是とする心内語になるが、それは省略した。老関白は最初、広沢入道に直談判していたが、広沢での仏道修行ぶりに遠慮して、長兄を仲人役にしたわけである。その意向を受けた長兄は、寝覚の君が結婚すれば男君との関係も清算され、大君も安心すると判断し、その役を買って出ることとなっていた。仲人役を引き受けることで、老関白とのかかわりを強めようとの判断もあったかも知れない。長兄が推進役になったことは、この段の後でも、次兄が男君に、次のように説明しており、確実であった。結婚に際しての左衛門督の働きは、大きいのである。

この春の頃より、申さるることはべりしかども、いかにも思ひよらではべりしを、この秋となりて、左衛門督まめやかに語らひたまふなれば、おぼし許してなんはべり。（改作本巻二・三九三頁）

大君を思う長兄の意向と老関白の意向とが合致したのであり、次兄にはあり得ない役割を演じることになっている。その具体的な働きとして次に語られのは、文使いの役になる。引用は省略するが、老関白は、長兄なら文使いの役をしっかり果たし、返書を貰えると判断していた（改作本巻二・四〇二～三頁）。父親が出家して西山に隠棲している現在、源家を取り仕切るのは長兄であり、老関白は最も有効な人物を仲人にしたことになる。

こうしたことがあって婚約は成立し、結婚は、広沢に住む寝覚の君を老関白が迎えに行き、そのまま自邸に引き取るという段取りになっていた。結婚を忌避する寝覚の君をせきたてて、車に乗せたのは、この長兄になろう。そして、御送りに奉仕したのも間違いない。

絶望的な結婚を強いられて悲嘆する寝覚の君を慰撫する役は、これまで通り次兄になり、また、男君との間にも立つことになる。老関白が、結婚後に長兄をどのように待遇したかは、改作本でもそれほど明らかでない。しかし、寝覚の君を溺愛する老関白は、長兄を引きたてることに留意したことであろう。具体的に知られるのは、二箇所ぐらいであり、一つ目は、前節で引用した老関白専断で行なわれた司召で、長兄を正二位の検非違使別当にしたことになる。検非違使別当は従四位上相当なのでおかしな処遇である。改作本の無知による改変の可能性は高いが、昇進があったことは、中間欠巻部分にもあったことと思われる。

二つ目は、老関白死去を語る段で、ここから「父子の礼」を長兄がとっていたと判断されることになる。

別当、中納言殿なども、この御わざに、おりたちつかふまつりたまふ。…別当は、ものの思ひやり深くもおはせねど、まことの親にもややたち勝りて、司・位も、人より先に進めおぼしたりしことなどおぼし続けて、孝子などの様にぞ、嘆き悲しみたまふ。（改作本巻四・四九五～六頁）

長兄・次兄が葬儀に奉仕する様である。ここで特段に長兄の説明を語り手は行なっている。長兄の性格を指摘したうえで、「まことの親」よりも多く昇進をはかってくれた老関白の死を嘆き悲しんでいるとしている。

「まことの親」は実親のことであり、実親にも増して真っ先に推挽を受けたとしており、先に確認した原作本と同断である。その理由としては、寝覚の君との結婚に仲人役を行なったこと以外に考えられない。この事情は、多分中間欠巻部分でも認められたと思われる。

長兄は、こうした老関白の死去に際して「孝子などの様」でいる。「孝子」は、親によく仕える子の意であり、これを翻案すれば、「父子

の礼」をとっていたことになる。「父子の礼」は、親子の間にあるべき礼節の意であり、実親子関係で使用されるのが普通である。しかし、実親子関係になく、養子縁組もされてない間柄で使用されると、それは親子関係を仮託しての臣従ぶりを表現することになる。例えば、『権記』の次のような記事が参考になる。

召諸卿之後、右左宰相中将退座、隠日華門内南扉掖、依左府可下自座之間、件両将予避座、是用父子之礼也、

（『権記』寛弘八年一二月一七日条）

議所から、右中将の教通と、源高明息の左中将経房が退座した際のことである。左府道長が自座に下がろうとした時、この二人は日華門の扉の脇に隠れて、あらかじめその座を避けていた。それで、「父子之礼」を取ったことになるが、教通は実の子なので当然である。しかし、経房は、母が師輔女であったので、道長とはイトコ関係であった。姉の明子が道長室になっていたので、三歳上の道長とは親密な関係性にあった。それなのに、経房は、教通とともにわざわざ「父子之礼」を取ったのである。左遷された父を持つ経房は、道長に「父子之礼」を取ることで、臣従ぶりを表わして、自身の立場を確保していたと言えよう。なお、道長と養子縁組は実際にはなかったと思われる。

長兄が老関白の死去に際して、「孝子のなどの様」でいたとされたのは、「父子の礼」を取ったのと実質は同じことになろう。源氏太政大臣家の長兄が、出養することはまず考えられない。その格に至らない家柄なら、あり得ることかも知れないが、長兄の出養は無理であろう。しかし、父が引退して以降、官人として生きていくためには、有力者の庇護が望まれるのは確かである。長兄は、老関白の結婚に際して仲人役をして歓心を買い、推挽を受けることで、いつしか「父子の礼」を取るようになったのであろう。改作本で、先のこと以上は明確でないが、中間欠巻部分にはもっと具体的に語られていたかもしれない。長兄は、老関白に「父子の礼」を取ることで、党派を明確にしたわけである。

＊　＊　＊

原作本での長兄のありようも、老関白との関係性をこのように捉えることで理解されると思われる。その次第は、先にみたごとくである。最後に老関白に付いた長兄が、男君の天下になった時、どのように待遇されたかを見ておきたい。前節で引用した、男君専断で行なわれた司召を語った段の続きになる。

按察使大納言（次兄）においては、姫君（石山姫君）の生まれたまへりし折の御心掟を、あはれにおぼししみにければ、人の恨みをも知らじと、引き越いて親子なし上げても、なほ飽かずぞおぼされける。故大臣（老関白）は、上の内々の御心ざしこそ（次兄に）いみじかりしか、おほかたは、権大納言（長兄）うらやみなくもてなしたまふところもありき。この御折の心は、ただこの人（男君）の御ままなるも、かたへは、人がら、心用ゐなどぞ、いとよくものしたまひける。

（原作本巻五・五二一頁）

司召で次兄が中納言から按察使大納言に厚遇された理由が示されている。石山姫君出生以来の次兄の働きを感じている男君は、「人の恨み」も問題にせず、特進させたわけであった。「人の恨み」の人は、具体的には権大納言に据え置かれた長兄になろう。かつての老関白の時代にあっては、寝覚の君が大切に思う次兄に対する厚遇を、長兄が羨むことなくされていた。しかし、男君専断による司召で、次兄だけが厚遇されても、その「人がら、心用ゐ」がよかったせいで、世間の誹りはなかったとしている。次兄厚遇の理由が、物語当初にまで遡って示されたわけであり、寝覚の君に辛くあたった長兄は、ここにきて厚遇されなかったことになる。しかし、老関白が引き合いに出されていることで、長兄が老関白配下として位置付けられ、時代が男君の専断を許すように変わって、すでに過去の勢力の一員と位置づけられたことを暗示しているのかも知れない。それというのも、長兄が老関白に「父子の礼」を取って、その党派の一員であったからだと思われる。

おわりに

以上、弟君が老関白の養子であった次第と、長兄が老関白に「父子の礼」を取っていた次第を見てきた。「父子の礼」を取ったとするのは、仮説になるが、その蓋然性は高いと思われる。だから、老関白から男君の時代になって、昇進はなかったのだと思われる。一方で、弟君は老関白の養子から、寝覚の君の養女の婿になったことで生き延びられたと言えるかも知れない。いずれにしても、『夜の寝覚』は、養子女やそれに類した関係性を語る物語であることは確かなのであった。

注

（1）坂本賞三氏「村上源氏の性格」（『後期摂関時代の研究』吉川弘文館、一九九〇年三月）。

（2）『源氏物語』では、匂宮の住む二条院を薫が「北の院」（宿木巻・三九〇頁）と呼び、その二条院に、薫の住む三条宮から手紙が「南の宮」（同・四六三頁）からとして届けられたという記述がある。これとは別に「北の宮」（蜻蛉巻・二二三頁）とする呼称もある。いずれにしても、薫と匂宮を、亡き光源氏を介して近い関係であることを示していよう。